

ベイタウンニュース恒例 年男・年女撮影会 今年は丑年 2009



年男・年女インタビュー

池田さん(公園西の街在住 写真下)

1999年に引っ越してきたので来年10年目になりますが、撮影会は初めてです。「いつもベイタウンニュースを見ていて私の番を待っていました。大人の女性はなかなか参加してくれないんですね」



得藤(えとう)さん(12番街在住)

最年長の参加は国際NPO活動などにも積極的に参加するという得藤さん。

来年の抱負をお聞きしたところ、「私は常に新しいことに挑戦しようと思っています」

トランプの「ブリッジ」の会(毎週1回コア工芸室で開催)は20数名の会員がいらっしゃるようですが、「頭の体操」の為に70歳を過ぎてから参加されたそうです。

溝口(6年)、奈良(5年)、今津(6年)、杉谷(5年)さん(写真下)

4人はジャズダンスの仲間。「いつもコアや11番街で練習しています。発表会は人数が増えたので、コアよりも大きなホールでやるようになりました」



田口さん(公園西の街在住)

西の街にお住まいの田口さんは親子そろって丑年。今日はお友達と一緒に参加しました。「何回目の撮影ですか?」とお聞きしたところ、「もちろん初めてです。」とかえってきました。そうか、この撮影会はまだ11回目、2回目という人はまだいませんでした。

田口さんにはベイタウンニュースの配布をいつもお手伝いいただいています。今年もよろしくお祈りします。

田中、浅野、小笠原、田上、阿部さん(写真下)

5年生仲良し5人組は海浜打瀬と美浜打瀬に通っています。

共通点は、スイミングスクールに以前通っていた、あるいは現在も通っていること。このうち4人が打瀬中学に進学するつもりとっていました。



謹賀新年

2008年元旦
ベイタウンニュース編集部一同

ベイタウンでカーシェアリングができる

ベイタウンニュース 11月号でも紹介した「幕張ベイタウン・カーシェアリング研究会」の初会合が11月29日11番街集集場で開かれた。発起人の田口さん（11番街在住）からカーシェアリングのプランを最初に聞いたのが10月下旬。この街なら実現の可能性は高いのではないかと思ひ、広報に協力して記事をベイタウンニュース11月号に掲載した。すぐに何人もの希望者が集まり今回初会合が開かれたという。

第一回の研究会でかなりの手応えを感じているという田口さん。早速内容を取材してみた。取材しての印象は、既に実現に向けかなり具体的に話し合いは進んでいる様子で、意外に早い時期に実現するかもしれない。現在固まりつつあるカーシェアリングのしくみとは次のようなものだ。

ベイタウンにおけるカーシェアリングの形(案)

- ・利用者は会員となり必要な時に必要な時間だけ車を利用する(30分以上15分単位24時間)。
- ・使用予約はPCや携帯を使って、インターネットもしくは電話で行う。
- ・リッターカー(1000cc)もしくは軽自動車1台を15人くらいで共同使用。ETC、カーナビ、エアコンなどはフル装備にする

・ベイタウン内の駐車場に置かれた車をICカードで開錠し、グローブボックス内のキーを使用(ICカードで開錠しないとエンジンがかからない仕組み)。

・車を使用した後は、元の場所に返却する(無人貸出・返却)。

・業者と契約し他の地域の貸出ステーションも利用できる(出張や旅行時)。

・具体的な費用の試算

- 登録時:登録手数料 ¥5,250、ICカード発行費 ¥1,480

- 固定費:月額基本料 ¥2,980

- 使用料(1ℓ車):時間 ¥190/15分、距離 ¥15/km

例えば家族で船橋のらぼーとに買物に行き食事をして帰ってくるという4時間ほどの利用を試算してみると次のようになった。

・時間料金:¥3,040 + 距離料金:¥300(約20km)

・ガソリン代、保険料、税金、整備代はすべて固定費や使用料の中に含まれる。

・支払はカードでの月払い

日本では車を所有するのが一般的であるが、環境にもサイフにも優しいこの仕組みは考慮する余地がありそうだ。1泊旅行などには割安なレンタカーを利用するなどして賢く



写真はイメージです。車種はまだ決まっていません。

使い分けすれば、費用的なメリットがあるだろう。

研究会の代表である田口さんは、来年3月までを目処にベイタウンでのカーシェアリングの実現を目指している。沢山の人が集まればそれだけシェアリングのメリットは高くなる。興味のあるひとは是非田口さん宛に連絡を取ってみるといい。【金】

連絡先:田口(mbcarssharing@gmail.com)

半年ほど前、10年以上乗り続けたマイカーにガタが来ました。業者は「大掛かりな修理が必要」とのこと。今後の費用と便益を考え、中古車も買わずマイカーを手放すことを決断。バスと電車、自転車が移動手段となりました。移動に要する総費用は激減。歩く機会は増え、最初は「歩くの、疲れた～」と愚痴っていた子どもも、最近は文句も言えず?遅く歩いています。しかし移動時間は当然増えました。大物の購入も考えてしまいます。急用時には困るかもしれません。数ヶ月前、昔聞きかじったカーシェアリング(CS)を思い出しました。複数業者に即、連絡を入れ幕張ベイタウンにCSを入れてもらうよう依頼すると同時に、11番街自治会の仲間を核に研究会を立ち上げました。今では「実現したら利用したい」という幕張ベイタウンCSクラブ会員数も、業者が提示した導入条件をクリアしようとしています。ベイタウンでのCSに対するニーズは思っている以上に高いかもしれない、と感じています。今後、どこにCSステーションを置くのか、何台で始めるのか、など早急に具体化していく予定です。会員は随時募集中です。次回研究会は1月17日(土)14時から11番街集集室。お問い合わせは、mbcarssharing@gmail.com までお願いします。

幕張ベイタウン・カーシェアリング研究会 代表 田口

なぞの石碑 この石碑の由来を知っている人はいませんか

石碑が置かれている場所は、海岸大通りのビーチテラス横の遊歩道の脇、芝土の盛り上がったところです。

「散歩の途中で見つけた不思議な石碑の由来を教えてください」と言う読者のご要望に応えようと調べ始めたのはいいのですが、時間をかけた割には手がかりすらつかむことはできませんでした。

調査は、先ず石碑そのものを確認することからはじめましたが、石碑には由来、設置日、設置者などを示す情報は一つありません。横幅90cm、高さ70cmのただの石が置かれているだけ。コンクリートでなく自然の石なので周囲の風景からは目立つ存在ですが、まさに謎の石碑です。

道路をつくった企業庁なら分かるかと電話しましたが、最初は「そんな石碑があるの」とこちらが聞かれたほどで、どうもうまく話が伝わりません。千葉市・美浜区役所・三井不動産・清水建設・マンションの管理人さんと、思いつく限り聞いてみましたが、そもそも石碑の存在自体さえ知らない様子です。

ならば石碑に刻まれた文字から由来を知ることができないかと思いましたが、石碑には、「すべてこれから日輪を置く青の海」と刻まれているだけで、他に手がかりになるようなものはありませんで

した。碑文からはこの場所(ベイタウン)がかつては海であったことを告げているようにも感じられます。

考えてみると、幕張新都心地区の埋め立てが開始されたのは1973年、埋め立て完了が1980年、ベイタウン住宅地区への初入居開始が1994年であることから、たった35年前ここは海の中だったのに、一大住宅地区が建設され、今やこの場所がかつて海だったことの痕跡すらないことは思い返してみると不思議で、石碑はそんな時代の移り変わりを物語って立っているようです。

石碑について何か知っている方は、コアに設置されている投書箱もしくは、ベイタウンニュース編集局の金(ikkim012@yahoo.co.jp)までご連絡ください。【金】

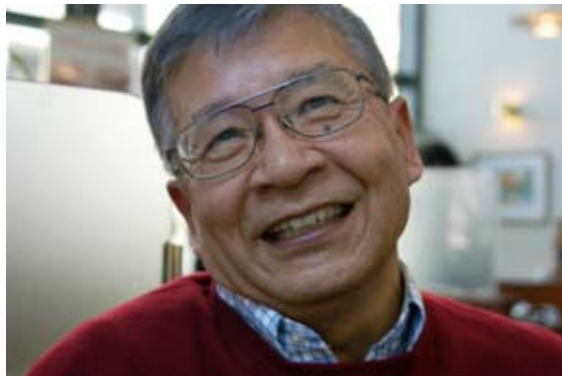


石碑のある位置

ビーチテラス(写真左)の海側の通りに面した部分にひっそりと立つ石碑(写真右)。敷地からは外れている。後ろに見えるのがビーチテラス。石碑は何の変哲もない石。それがかえって謎をかき立てるようです。



同じ 10 番街に住む坂本武信さんが 2 冊目の本を出版した。前作「老学生の日記」は団塊の世代が迎える第二の人生のヒントとして話題になり、NHK ラジオでも朗読された。1 万部を売り現在は第二刷と順調だ。第二作のタイトルは「留学生は 64 歳」。それまで文章と言えば仕事で書いた「詫び状」の他には書いたことはないという坂本さんが、エッセイストになるまでのこれは物語だ。【松村】



夏の日午後、坂本さんは地下鉄の六本木駅に向かう階段を降りていた。その日は高血圧と糖尿病の検査でかかりつけの病院に行き医者から大丈夫だとの言葉を聞いての帰り道だった。

突然彼は階段を踏み外し転がり落ちた。いや落ちたらしい。というものそのとき彼には意識はなく、病院へ救急搬送される間の記憶も全くなかった。急性心筋梗塞だ。ぼんやりとした意識の中で「まだ家族と連絡はとれないのか。間に合わないかな」という医者の声を聞いたような気がする。

30 分前に出た病院に救急車で運ばれ緊急の手術を受けたことも、夕方になってやっと連絡がついた奥さんが千葉から駆けつけたことも、全ては手術後の麻酔から目が覚めて初めて知ったことだった。5 年前の 2003 年。坂本さん 58 歳のときだった。

幸い一命はとりとめ 6 週間の入院で健康も取り戻したが、この日から坂本さんの人生

は一変することになる。大学を出て保険会社につとめて来たが、以後は仕事に身が入らなくなったという。結局退職まで 1 年余を残して会社を辞めることに。奥さんには当然反対されたが、「四六時中家に居て新聞とテレビだけの生活をしないという条件で了承してもらった」

「何か面白いこと」を探して見ていたインターネットで大学に社会人のコースがあることを知り、好きだった外国語ができることを知った。いくつかの大学の募集要項を取り、うまく時間が合う東京外大に行ってみることにした。外国語は得意な方だ。5 年間のロンドン駐在で英語は自信がある。高校時代にたまたま習ったフランス語も多少はできる。今度はスペイン語かイタリア語かと期待して事務室に行ったが、これらの人気のある言語に社会人の募集はなく、あるのはポーランド語、チェコ語、モンゴル語などどちらかと言えばマイナーな言葉だった。どうせ暇つぶし、ど

れでも同じだろうと、たまたま最初に面接を受けたポーランド語がなぜか気に入り入学する事にした。

社会人コースとはいえ授業は普通の大学生と同じだ。試験もあれば単位も同じように取る。若い学生と大学生活を送るうち、たまたま同年齢の仲間のサークルで出している機関誌に「還暦の青春」と題したエッセイを書いた。自分の子どもよりも若い世代の大学生達と老学生とのキャンパス生活を書いたところ、仲間から面白いのもっと書けと言わる。連載するうちにそれが産経出版の編集者の目に留まることになり、本にしてみないかと言われ、軽い気持ちで引き受けた。

本が出たのは今からちょうど 2 年前。2006 年 12 月だった。処女作「老学生の日記」の出版だ。団塊の世代の退職後の生活や生き甲斐が話題になっていたこともあり、この種の本にしては意外に話題になった。一時はエッセイスト賞にノミネートされるほどにもなり、出版社からは次作を求められた。だがもうネタがない。もともと作家になりたいと思って書いたものでもないし、ここは付録の人生を楽しむべく入学した大学生活とポーランド語の学習に戻ることにする。

語学の勉強は思いのほか進んだ。ポーランド語科 15 人の中では成績は常に上位。そして難関の編入試験に挑戦して合格し、ついに正規学生として 2 年生に編入した。だが最終学年の 4 年生を前にして、ふと考えた。同級生たちは就職活動に精を出す自分が自分にはそんな目標はない。できれば大学に留まって学生生活を続けたい。そこで思いついた。「留学」だ。1 年間大学を休学しポーランドに留学すれば卒業は 1 年延びる。何より面白くなって来たポーランド語とその国をよく知ることが出来る。そうだそうしよう。大学を卒業すれば「ぬれ落ち葉」になるのではないかと恐れていた奥さんもこれなら説得できる。うまくすれば次の本のネタになるかもしれない。こうして坂本さんは 64 歳の留学生となり、ポーランドの古都クラクフへと向かう。

と、ここまで坂本さんの作家誕生物語を原著の文章から引用しながら書いた。坂本さんの文章は軽妙で、ユーモアのある語り口に引き込まれて飽きずに最後まで読んでしまおう。ポーランド留学後の続きは坂本さんの本を読んで欲しい。年を取るといろんなことに鈍感になるらしいが。その鈍感さを逆手に取り人生の一大事を「どうせ付録の人生」の出来事と受け止め、さらりと語る坂本さんの人生観には著書以上の面白さを感じた。

それにしても坂本さんのお宅と我が家とは向こう三軒両隣の距離だ。こんな近いところでこんなドラマが起きていたとは全く気づかなかった。

坂本さんの著書「老学生の日記」と「留学生は 64 歳」は産経新聞出版社より出版されています。各書店でもお求めに出来ますが、直接ご本人に問い合わせいただければサイン入りでお求めいただけます。お問い合わせは坂本武信さん (Tel : 043-211-1583) まで。

1 月のコア・イベント

1 月 11 日 (日) 恒例「もちつき会」

主催：打瀬中学校区青少年育成委員会
打瀬中学区青少年相談員連絡会

恒例となりました青少年育成委員会・青少年相談員主催のもちつき会を以下のとおり、今年も開催いたします。皆さまの参加をお待ちしております。
時間：9：00～先着順受付開始

※雨天の場合は 12 日 (祝) に順延

場所：ベイタウン・コア 中庭
体験参加費：100 円

要領：9 時より受付を開始しチケットを販売します。1 回目を 10 時～とし、以降 30 分おきに 8 回 (13:30～) 4 白にて実施します。受付順に早い回数のチケットを販売します。先着 960 名で締め切りとします。

※小学校 3 年生以下は保護者同伴にてご参加ください。

※先着 960 名での実施になります。チケット売り切れについては予めご了承ください。

※保護者の方は、お子様のお餅の喉への詰まらせには十分にご注意ください。

※ベビーカーでの会場内立ち入りはご遠慮ください。

※ペット連れでの参加はご遠慮ください。

※紙皿、割箸はご用意いたしますが、ご持参いただいても結構です。

※お餅のお持ち帰りはご遠慮ください。会場で召し上がってください。

【問い合わせ先】青少年育成委員会レクリエーション部部長 田中敏嗣 070-5014-0741

1 月 17 日 (土) わくわくおはなし会

1 月の常設おはなし会

時間：10：30～

場所：ベイタウン・コア 講習室 (途中入場もできます)

年齢制限なし。予約は必要ありません、みんな来てね。

今月も、楽しい絵本やゲームを用意してまいります。

1 月 24 日 (土) 寺子屋工作ランド

時間：9:30～

場所：ベイタウン・コア 工芸室

持ってくるもの：小刀、工作道具

参加費：50 円 (保険料)

1 月 30 日 (金) 子育て支援学級 (育成委員会主催)

時間：10:00～12:00

場所：コア 講習室

グループになって日頃の子どもの向き合っていること、工夫、知りたいことなどを分かち合う場です。当日は男の方、子育てを一段落された方どなたでも自由に参加できます。

「ファツィオリの会」は 1 月はお休みです。2 月からまた毎月、第 4 日曜日に開きますのでよろしく願います。

2009年丑年。ペイトウンの皆さん、明けましておめでとうございます。初詣には行かれましたか。山形県の山寺に思わず頷いた名句がありました。「願い事は努力せよ」。

1年経つのが年々早まっているように感じます。もっとも10歳の子どもの1年は、全人生の1/10なのに対し、50歳の人1年は1/50。人生の分母が増えていくのだから、新年がやってくるのも早まるってものです。

さて、新年号は「科学部」にスポットライトを当てました。

去る11月29日、火星探査ロボット「火星ローバー」を模して制作したオリジナルローバーのアイデアや機能を競う「第10回火星ローバーコンテスト」が千葉市中央区の「きぼーる」で開かれました。ぞくぞくと集まる県内の小中学生。本校の科学部はこの大会に勝負を賭けます。このコンテストは火山やクレーターなど、実際の火星表面をイメージした凸凹のあるコースを自作ローバーで走らせ、与えられたミッションをクリアする競技です。関裕秀・中村由美子顧問のもと、科学部総勢14名が材料選びから組み立てまで、知力を結集して“研究開発”したのが四駆型のローバー「MPD」(※名前の由来は火星の衛星 Mars, Phobos, Deimos の略)です。まるでサンダーバード2号のコンテナに乗っているジェット・モグラのように(古い! 地中には潜らないけど)コースを力強くひた走ります。製作リーダーは部長の寺島君、補佐は橋本君です。火星の表面を知るために「赤外線地質センサー」と「通信用レーダー」を取り付けました。さらに狭い場所での探査を想定し、本体「MPD」のテール部分に子機も取り付けました。材料はほとんど部室にあったものを再利用したのだからエコ作品でもあります。操縦するのはスコット・トレーシー(古い!)ではなく、持田君、池田君、東城君、八木君の4名。

前半、「MPD」は次々に障害物をクリアし華麗な動きでコースを疾走しました。しかし後半、クレーター地質調査においてトラブルが発生し操縦が複雑になり、なかなかうまくミッションをクリアできなくなりました。やがて「タイムアウト!」。健闘むなしく優勝は都賀中の「∞」(無限)に持って行かれました。

こうして様々な課題を残して大会は終了しましたが、部員たちは新たな意欲を燃やし始めました。月曜日の部活では、科学部部室にて反省会が開かれ、黒板いっぱい反省点を書き出されました。部員全員が目が「来年こそ火星の大地を一番で駆け抜けようぜ!」と炎に包まれていました。 **【打瀬中教頭 青木 一】**



うどうりおん 街で育てる音楽家 有働里音さん (打瀬小3年)

ペイトウンで音楽を習っている子ども達にピアノに次いで人気の高い楽器はヴァイオリンだろう。放課後、街でヴァイオリンを肩に掛け先生のもとへと急ぐ子ども達の姿を見かけることも多くなった。

今回紹介する「街で育てる音楽家」はそんなヴァイオリンを習う小学生の一人、有働里音さん。小学3年生ながらすでに「第9回大阪国際音楽コンクール 本選(ジュニア部門)」で金賞 ファイナル1位受賞というタイトルを手に入れている。

里音さんがヴァイオリンを始めたのは5歳のとき。たまたま渋谷の楽器屋さんの店先で最小サイズの分数ヴァイオリンを目にしたのがきっかけだった。余りの小ささに最初はオモチャのヴァイオリンと思ったそう。しかし小さな子どもでも始められるように大人用の16分の1のサイズに精巧につくられた本物の楽器ということを知り、やってみることにしたという。

九州にお住まいのお祖母さんの紹介で東京で先生につくことになったが、師事したのは東京芸大の清水高師教授。普通習いはじめの子どもへの指導はしないのだが、このときは里音さんがまだ全くの初心者だということを知らずに会ってしまい。結局引き受けてくれた。幸運だった。

以来4年間、清水先生の指導をうけ今年10月の大阪国際音楽コンクールでの金賞受賞となった。

その里音さんの演奏を昨年12月21にコア・音楽ホールで開かれた「ウィンターコンサート」で聴くことができた。小学3年生

とは思えない音程の確かさや乱れないテンポにも驚いたが、なんとと言っても自分で音楽を作り表現する力には驚かされる。小さいが自分の中に完全に一人の音楽家、ヴァイオリニスト有働里音を育てている。子どもの演奏を聴くときの指標として技術の他に、もうひとつの別の大切なものがあることを知らされたような気がした。

「1日にどのくらいの時間、練習するの?」と聞いたが、愚問だった。今、里音さんの頭の中はヴァイオリンのことでいっぱい。お母さんの言葉を借りれば「四六時中。朝起きてから寝るまで、食事やお風呂に入るとき以外はずっとヴァイオリンのことが頭を離れない」そう。

この子にはまた近い将来インタビューさせてもらうことがあるだろう。そのときを楽しみに用意してきた質問を次回に回してインタビューを切り上げた。 **【松村】**



ペイトウンの皆様へ 高木 竜馬

コアホールでは05年9月と06年2月にリサイタルをさせて頂き有難うございました。この場をお借りして今回の曲目を紹介させて頂きます。(1) ベートーヴェン ソナタ第23番へ短調 熱情 / 楽聖ベートーヴェン 全作品の最高峰に数えられるばかりでなく、今日までに作曲されたすべての音楽作品の中でも屈指の傑作です。聴覚がほぼ完全に失われつつある時期に着手され、絶望の彼方に実音のない世界で作曲のみに全人生を捧げる決意をした情熱のまぶしい光が伝わってくる偉大な作品です。(2) シューマン 謝肉祭 / シューマンの傑作として有名なこの大曲は、独自の詩的情緒やドイツロマンティックの時代の香りに溢れています。共にピアノを学んでいた聡明で清純なエルネスティネと恋に落ちた時の作品です。彼女の故郷アッシュ(ASCH)と自らのスperl(SCH-umann)のA=イ、Es(S)=変ホ、C=ハ、H=ロをモチーフに曲を作り上げました。(3) ラヴェル 夜のガスパール / 『夜のガスパール』は無名のまま夭折したフランスの天才詩人ベルトランの散文詩集です。フランス近代詩の父ボードレールの手によりこの歴史的名作は世に送り出されランボーやヴェルレーヌに大きな影響を与えます。創作の絶頂期を迎えたラヴェルは、この詩集より「水の精」「絞首台」「スカルボ」の3編を表題にし三楽章構成のソナタとしてこの傑作を作曲しました。(4) ムソルグスキー 組曲 展覧会の絵 ムソルグスキー原典版 / 友人であった建築家で画家のガルトマンの急死に接したムソルグスキーの落胆は深く、その遺作展覧会の10枚の絵画に曲を付けさらに6曲の『プロムナード』を加えて有名な組曲“展覧会の絵”を作曲しました。今回は妹の薫子も、グリンカの“ひばり”とシューマンの“アベッグ変奏曲” Op.1 を弾かせて頂きます。兄妹で一生涯懸命準備したいと思っておりますのでどうぞ宜しくお願いいたします。